

平成17年 5月20日

# 砺波医師会誌

## 杏和だより

第184号

### ◇◇◇ 目 次 ◇◇◇

〔時 評〕・医師会費のあり方について .....	吉岡 勉	2
〔活動報告〕 .....		3
〔花 暦〕・輸血 .....	桐沢しょう二	7
〔散居村〕・気ままな横着釣り .....	八尾 直志	8
・北アルプス .....	柳澤 伸嘉	10
・CureでなくCareでよい? .....	山田 泰士	11
・他人事じゃない拉致問題 .....	山之内菊香	12
・個人情報保護法 .....	柳下 肇	12
〔新入会員紹介〕 .....	やました医院 山下 良平	14
..... 市立砺波総合病院 循環器内科	広野 正明	14
..... 市立砺波総合病院 精神科	岸澤 進	15
..... 石黒医院	石黒 聖子	16
〔編集後記〕 .....	柴田 崇志	17

発行所 砺波市幸町 6 番 4 号

砺波医師会

発行人 砺波医師会長 高橋 卓朗

## 医師会費のあり方について

南砺市医学会長

吉 岡 勉

平成17年度の富山県医師会、一般会計予算案が、県・都市医師会協議会（H17.3.4）にて示された。基金特別会計からの繰入金（1,000万）と、前期繰越金（2,100万）に頼った予算で、明らかに財政破綻の状況と言える。

近年の医療環境の悪化に伴う医業収入の減少、医療法人の増加、個人情報保護法の成立等により、自己申告制に基づく応能割りが時代にそぐわない事を、県医執行部はもっと早くに気づき、対応すべきであった。

担当県医常任理事は、本年度にプロジェクト委員会を設置し、千葉県医師会の会費の全国調査の結果を踏まえ、次期役員に継承するとしているが、早々に抜本的改革を行おうとする気概を感じられない。本来、医師会から受ける恩恵は、皆平等のはずである。だとすると、均等割りが望ましいことは論を待たないが、支出をそのままにして、会費だけを均等割りにすると、確実に会費が増える会員が多くなり不評を買う恐れがある。

例えば、私は、救急医療委員会に年に数回出席しているが、その都度、交通費として9,500円が支給される。県医には、約30の委員会があり、各々の会合には、10数人が出席、年に何回か開催される。それ以外にも、代議員会、都市医師会会長会、理事会等の会合があるとすれば、その交通費だけでも馬鹿にならない。私は、医師会活動はボランティアと理解している。交通費の支給は即刻、中止すべきである。どこの医師会でも、最大の支出は職員費である。県医師会では平成17年度、6,726万が計上されている。職員の数も定かでないので、適正か判断できないが、給与体系の見直し等、職員費の削減に留意すべきである。南砺市医学会は、平成16年11月1日発足後、何度も理事会を開いた。交通費は支給していないが誰からも文句も出なかったし、議題にも上がらなかった。職員費も圧縮し、平成17年度会費は、総会で均等割りが採択された。A会員10万円、B会員3万円、B2会員1万2千円、C会員3千円、D会員（県医に属さない勤務医）3千円、最低限慶弔費は残すが、祝い金は廃止の方向で検討中である。

無駄な支出を減らし、事業を縮小する事無く、如何に、均等割りで、医師会費を低く抑えられるか、県医の動向を見守りたい。

## 活動報告

(平成16年11月～平成17年4月まで)

### 平成16年11月

- 1日 南砺市医会理事会
- 4日 富山県医療推進協議会設立会  
郡市医師会長協議会
- 8日 定例理事会
- 10日 南砺市医会総会、南砺市医会理事会
- 11日 産業保健研修会  
「健康指標としての欠勤の難しさ」  
金沢医科大学衛生学教室助教授 石崎 昌夫
- 15日 となみの医局会
- 16日 南砺市民病院医師研修会  
「脳卒中のリハビリテーション」  
南砺市民病院リハビリテーション科 八尾 直志
- 24日 南砺市医会臨時理事会
- 27日 国民の医療を守る県民集会～皆さんの健康保険が危ない～
- 30日 医療情報システム委員会（県医）

### 平成16年12月

- 2日 広報委員会（県医）
- 6日 砺波市理事会  
南砺市医会理事会
- 13日 定例理事会
- 17日 砺波医療圏小児急患センター運営審議会専門委員会
- 20日 となみの医局会
- 21日 がん検診特別委員会（県医）  
砺波・西砺波郡市医師会合同学術講演会  
「糖尿病患者の心血管合併症を予防するための薬物療法」  
J T 京都専売病院 榎 田 出  
南砺市民病院医師研修会  
「小児保健あれこれ ～親の心配ごとと小児科医の指導～」  
南砺市民病院小児科 片 山 啓 太

27日 富山県医療審議会

平成17年1月

- 4日 砺波市理事会
- 6日 郡市医師会治験に関する担当役員連絡協議会
- 7日 南砺市医会理事会
- 11日 定例理事会
- 17日 となみの医局会
- 18日 南砺市民病院医師研修会  
「肥満症の臨床」  
南砺市民病院内科 相川 秀彦  
産業保健小委員会（県医）
- 19日 救急医療委員会（県医）
- 21日 南砺市医会臨時理事会
- 23日 砺波医師会市民公開講座  
「脳卒中を良く知ろう ～予防と治療の進歩～」  
『脳卒中の病態と治療について』  
市立砺波総合病院神経内科 白崎 弘恵  
『脳卒中のリハビリテーションについて』  
南砺市民病院内科 南 真司  
『摂食・嚥下障害について』  
公立南砺中央病院耳鼻科 石丸 正  
『胃ろう（PEG）について』  
市立砺波総合病院消化器科 太田 英樹
- 25日 学術講演会  
「アレルギー性鼻炎の診断と治療」  
富山県立中央病院耳鼻咽喉科部長 北川 和久  
四地域産業保健センター連絡会
- 28日 となみ野オープンカンファレンス
- 29日 平成17年度砺波准看護学院入学試験
- 31日 南砺市医会臨時総会

## 平成17年2月

- 3日 砺波准看護学院運営理事会
- 7日 砺波市理事会  
南砺市医会理事会
- 8日 第四回砺波病診連携懇話会
- 14日 定例理事会
- 15日 南砺市民病院医師研修会  
「C型肝炎の臨床」  
富山医科薬科大学第三内科 平野克治
- 16日 乳幼児・学校保健委員会（県医）
- 18日 とやま治験センター説明会
- 21日 となみの医局会
- 22日 学術講演会  
「メタボリックシンドロームと内臓脂肪」  
金沢大学大学院生活習慣病講座教授 小林淳二
- 23日 砺波地域産業保健センター小委員会
- 25日 となみ野オープンカンファレンス 「睡眠時無呼吸」
- 28日 富山県医療審議会  
学術生涯教育委員会（県医）  
砺波地域産業保健センター運営協議会

## 平成17年3月

- 1日 県医師連盟執行委員会
- 3日 砺波准看護学院卒業式
- 4日 県・郡市医師会協議会  
広報委員会
- 7日 砺波市理事会  
南砺市医会理事会  
公的病院長と県医役員との懇談会
- 10日 結核予防医師研修会
- 11日 産業保健懇談会
- 14日 定例理事会

- 15日 南砺市民病院医師研修会  
「新しい創傷治療」  
南砺市民病院外科 高 橋 信 樹
- 17日 職域における新県民ヘルスプラン推進事業連絡会議  
砺波医療圏小児急患センター専門部会
- 18日 乳幼児・学校保健伝達講習会（県医）
- 24日 砺波医療圏小児急患センター運営審議会  
県医師会定例代議員会
- 25日 となみ野オープンカンファレンス  
「平成16年の医療機器共用利用報告」  
「最近のインターベンショナルラジオロジーについて」
- 27日 平成17年度定例総会  
学術講演会  
「糖尿病診療アラカルト～メタボリックシンドロームを絡めて～」  
黒部市民病院院長 高 桜 英 輔  
富山市医師会健康管理センター竣工披露パーティー
- 28日 南砺市医会臨時理事会

#### 平成17年4月

- 4日 砺波市役員会（砺波市理事会を名称変更）  
南砺市医会役員会（南砺市医会理事会を名称変更）
- 7日 砺波准看護学院入学式
- 11日 定例理事会
- 19日 南砺市民病院医師研修会  
「腎疾患診療の進歩」  
南砺市民病院内科 五 島 敏
- 20日 富山県医療推進協議会  
広報委員会
- 22日 となみ野オープンカンファレンス
- 26日 学術講演会  
「在宅におけるPEGの有用性」  
小川医院院長 小 川 滋 彦  
学校心臓検診委員会・心電図判定専門委員会（県医）

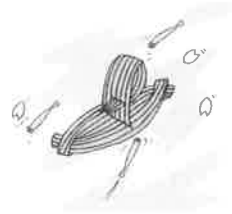


輸 血

救命の血に毒ありし心凍る  
産科医に出血の修羅身にぞ入む  
母子救う輸血悔なし凜然と  
輸血禍のニュース冷たしわが名視る  
悪しき薬与えずの訓身に入みて (ヒポクラテスの訓)

金 沢 犀 川

犀川に練成凍るはるかの日  
ぶっきらぼう金沢言葉冬の川  
古オーバ秘めいしマルクス・エンゲルス  
余生とは言うまじ寒き橋渡る  
メッチェンと呼びしは昔ジブ煮える



尉と姥

啓蟄や尉と姥との生きる隅  
国旗どこへしまい忘れし建国日  
雪しまく女もすなり格闘技  
雪は好き雪は嫌とて誕生日  
散居村散居のままの雪間かな

雪 間 草

卒寿なほ婦長美し雪間草  
「愛染かつら」唄へば昔雪間草  
あるときは母のきびしさ雪間草  
あるときは姉のやさしさ雪間草  
特攻と話して泣きて雪間草



## 気ままな横着釣り

南砺市民病院リハビリテーション科

八尾直志

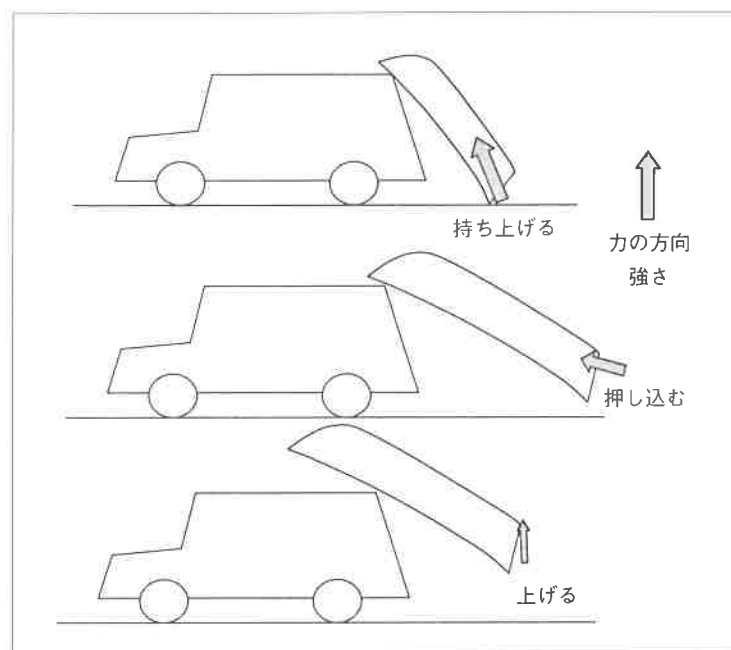
それはたまたま本屋で見かけた1冊の本から始まりました。

「マイボートは車に積んで」と題された本は小さなボートを車に積んで自分の好きなフィールドで魚釣りを楽しもうという本です。

魚釣りを趣味にしていない方にはお分かりにならないと思いますが、最近の釣り場は人人人人……。良くつれる場所など暗いうちに場所取りをしなければ釣りになりませんし、隣との喧嘩も日常茶飯事です。「広い海なら喧嘩も無いだろう。」

それからしばらくして買いました。最初8.5フィートの小さな船に5馬力のエンジンを車に積んで出かけます。その頃はまっていた、入り江の黒鯛釣り、主に七尾湾です。筏などからの釣り方（かかり釣り）を真似て釣りました。良くつれます。1日釣ると30匹以上釣れる事もあります。しかし、人は欲が深いというか、しばらくすると他の魚も釣れるのではないかと思います。メバル（このあたりではハチメと呼びます）を狙って富山湾に出てみました。静かな七尾湾に比べると、やはり波が高いのです。小さな船では少し不安です。「マイボートは・・」を読むと、同じ船で太平洋に出ている豪傑もいますが、もう少し大きな船が欲しいと考えました。これを「1フィート病」と言うそうです。1フィートでも大きな船が欲しくなって次々買い換える人が多いのだそうです。感染したのかもしれませんが。

でも実は大き目の船の方が車に積みやすいのです。この図を見ていただければ分かります。小さな船ではそのまま持ち上げるために、殆ど船の総重量を持ち上げなければなりませんが、





大きくなると車の上に押し込む形になるのでシーソーの原理で、持ち上げる力はわずかで済みます。

そんなわけで2年足らずで買い換えた船は13フィートと大きくなり、エンジンも8馬力になりました。この船は48kg（8.5フィートは36kg）ですが、非常に安定性が良い船で多少の波でも怖さを感じません。GPS魚探（カーナビと魚群探知機が一緒になったもの：データを残せる）を駆使すればいろんな魚を狙えます。春から秋口は福井方面へ行って呑ませ釣りをします。これはGPS魚探を使って深さ50~80mの根（海底の岩場）を探し、生きアジを餌にひらまさ（富山名しおのこ）はまち（70センチほど：がんどクラス？）ひらめ、キジハタを狙う釣りで豪快な釣りです。昨年は何度もハリスをぶっ千切れ、竿も折られました。またオキアミのこませ釣りで真鯛、大アジを狙います。真鯛は最高68センチ（大きすぎて不味い）が2匹つれました。秋から初冬までは富山湾、能登外浦でアオリイカを狙います。擬餌針を使った味のある釣りです。冬から春にかけて新湊沖の深場でヤリイカ、鬼カサゴ、赤むつ、モンゴイカ、アマダイなどを狙います。70mから深いところでは250mほどの深さを狙います。

大型のクルーザーをお持ちの方もおられます。確かに、波にも強く何よりかっこいい。しかし、係留されている海域での釣りです。新湊から福井の釣り場は行けません。福井県の越前海岸などは近くにマリーナも無いので小型ボートの独壇場なのです。また、富山湾では北東の風が強い時は海に出れませんが、石川県、福井県方面は風裏で凪いでいるのです。そんな、楽しいボート釣りですが、小さいがゆえに制約も勿論あります。

- ① 現在2馬力以上のエンジンには免許が必要です。私は訳があって、医局に入りたてに1級の船舶免許を取りました。実はその後30年間近くペーパードライバーだったのです。
- ② 当然、海が荒れると小さな船では危険です。風や雲、遠くの気配を読んで、危険な時には引き返す勇気が必要です。気象庁の発表する天気図を読んでその日の天候の変化を予測する知識も大切です。
- ③ 意外と船を出せる場所が少ないのが現状です。港のスロープ（漁船を引き上げてある場所）から出す事が多いのですが、漁師さんに断ってから出させてもらう。スロープを汚さない配慮が絶対必要です。
- ④ うねりがある時など小さな船は他の船から視認されにくいものです。高いポールの先に旗（はた）などを立てて目立つようにします。

その船は自宅の車庫の天井から裏返しにぶら下げてあります。車を下に持ってゆき、滑車を緩めて車に積み込みロープで固定します。所要時間は5~6分でOKです。マリーナ

に預けると年間でかなりの維持費がかかります。8馬力のエンジンで1日走り回っても5～6Lで済みます。が、なんとと言っても大海原で船を止めて温かいインスタントラーメンを作り、冷たいビールでキューツが最高ですが、昨年からは船も飲酒運転禁止になりました。あくまで運転が禁止で、止まっていれば大丈夫?・・・

## 北アルプス

柳澤医院

柳澤伸嘉

北アルプスはよく知られているように、富山、長野、岐阜の3県にまたがる飛騨山脈の総称です。私をはじめ北アルプスを訪れたのは、30年前の高校1年生のとき、山岳部の夏合宿としてでした。信濃側（信濃大町）から入山し鹿島槍ヶ岳～針の木岳～黒部湖の平らの渡しで渡船し五色が原～立山、剣岳～黒部ダム（佐々成政のザラ峠越えのコースとも推測されている）まで8泊9日のコースでした。15歳の高校生の中には大変きつい山行でしたが、これがきっかけとなりその後も登山を続けることになりました。大学時代には黒部源流、剣岳、立山～穂高までの縦走など何度となく訪れておりますがそのつど、その山容に魅了されてまいりました。社会人となってからは、時間が取れずしばらく遠ざかっておりました。3年前より砺波にて開業して自宅より毎日、剣、立山連峰の雄姿をながめようになり、北アルプスへの思いが再び湧き上がり再度北アルプスの山々に登るようになりました。久しぶりの登山で、自分の体力のなさや、登山形態の様変わりを実感いたしました。山小屋は新しく立派となり、売店にはトレーナー、Tシャツから菓子類、なんと生ビールまでも販売しておりました。利用者も、多くは私よりひと周り以上も年配の中高年者であり、とくに女性が多いことに驚かされました。その方たちが1日8～12時間も歩行の後、山小屋に着くたびに生ビールのジョッキで祝杯をあげているのを見て、最近の若者には感じられないバイタリティーを感じる半前、山小屋も従来の下界とは離れた特別な場所から日常生活の延長した空間となりつつあることを実感し、少し残念に感じました。やはり山、北アルプスは私に何らかの発見を与えてくれる存在のようです。今も時折、地図を取り出しては、夏の登山計画を作っては楽しんでおります。体力が衰える前に、いつかは、白馬岳より北アルプスの北端である親不知、日本海までの梅海新道縦走をと夢見る今日この頃です。



## CureでなくCareでよい？

市立砺波総合病院 整形外科

山田 泰士

普段は漫画をあまり読まない私が、最近「ブラックジャックによろしく」（講談社）という漫画を手にすることがあった。その中には、研修医が医者としての無力さに苦しむ姿が描かれている。私は、整形外科医になり早くも13年目に入ったが、患者の思いと医者として私ができることのギャップの間で苦しんでいる。しかし、最近になり、CureとCareの1字しか違わない二つの言葉を意識するようになり、「CureでなくCareでよい」と考えるようになり、私の苦しみが和らいできているように感じられる。

3年前の夏、某高校の野球部のキャプテンが、甲子園出場のかかった大会の一回戦で足関節を負傷した。その試合に勝ったため、2日後の次の試合までに治して欲しいと選手本人、家族、監督に希望されたが、足関節の靭帯損傷であり、復帰までには1か月以上かかる外傷であった。医者として、患者の希望はかなえられない。言い換えれば、医学的な立場からはCureを目指すのであれば、次の試合出場は避けるべきである。しかし、患者、家族はそれを望まなかった。本人との話し合いのなかで、私は医師として医学的には間違っていると感じながらも、Careすることに同意した。私は、試合直前に球場の控室で足関節内に局所麻酔を注入することにした。この方法は疼痛を一時的に軽減するためのCareではあるものの、長期的にはさらなる損傷を生じ、Cureを遅延することにもなりかねない。その結果、患者は試合序盤こそまざまざの動きを見せてくれたが、試合が終わるころには、歩くことも不可能となった。残念ながら、甲子園出場はならなかったものの、患者にはとても感謝された。

よく考えてみると、毎日の診療の多くはCareであることに最近気付いた。私は毎日多くの外来患者を診察させていただいて、一所懸命にCureを目指しているような錯覚をしていただけである。その証拠に、私の外来予約患者数が減らない。私の診療にて患者がCureしていれば、患者数は減るはずである。患者の中には、患者自身がCureを望んではいないもの、Cureをあきらめているものが多い。例えば、変形性膝関節症の患者の多くには関節内注射を行い、鎮痛剤の投与を行っている。Cureを目指せば、手術的治療が望ましいのかもしれない。しかし、患者は痛い足を引きずり外来に通ってくる。それで患者は不幸なのだろうか？手術を受けた患者がすべて幸せなのだろうか？

一字違いの言葉ではあるものの、「CureでなくCareでよい」と信じている。そんな私は、ブラックジャックには到底なれない。

## 他人事じゃない拉致問題

山之内医院

山之内 菊 香

南砺市（旧福野町）で平成十五年四月より内科医院を開業しております。杏和だよりの原稿依頼を受け、何を書こうかあれこれ思い悩んでいるうちに、締め切り間近となり、あわててキーボードを叩いています。わたしの出身は鹿児島で、代々医者を経営していますが、次男坊ゆえか、縁あって福野で開業した次第です。

さて拉致問題とは仰々しい表題ではありますが、なにも社会問題を論ずるわけではありません。一連の拉致事件の一件で、昭和五十年に市川修一・増元るみ子さんが、行方不明になり、その後北朝鮮に連れて行かれた事件がありました。その現場こそ、私の出身地鹿児島県吹上浜なのです。当時大学受験に失敗し浪人生活を送っていたドラ息子の私は、買ってもらった中型バイクで、近隣を走りまわるのをストレス発散にしていました。拉致当日夕刻も、まさにその現場周辺を走っていました。海岸にも行きましたが、いつもと全然変わりのない風景だったと記憶しています。数日後行方不明事件として取り上げられ、その後拉致であることが判明しました。もしあの時通りかかる時間帯がずれていれば、私が拉致された可能性も十分あったと思うと（もっとも私のようなものは、向こうから願い下げかもしれませんが）人生一步間違えば何が起こるかわからないものだと思います。幸い今こうしてこんな他愛のないことを書いていられるのもなにかの運命でしょう。最近なにかと物騒な世の中ですが、平々凡々と暮らしていければと思う今日この頃です。尚拉致について詳しくお知りになりたい方は、何かの機会でもあればお話しします。

---

## 個人情報保護法

柳下小児科内科医院

柳 下 肇

4月から個人情報保護法が施行され、我々医療機関も個人情報の管理に一定の法律的義務が課せられるようになりました。当院でも医師会から配られたポスターの掲示、従業員から誓約書をとる、個人情報保護に関する院内規定を作るなどの対応をし、けっこう緊張してその日を迎えました。ただ受診される方々にはその感覚はほとんどないらしく、表面上は至って平静です。個人情報に対する認識が曖昧で、どこまでを保護の対象にするか、

どこまでは許されるのかまだまだわからないことだらけです。今後いっぱい問題が浮上してきてその都度対応を迫られることになるんでしょうが、まだどんな問題が出てくるのか見当もつきません。保険情報や診療情報は厳重な管理下に置くのはもちろんとして、どこそこの誰それがあそこの病院にいたという事実自体も考えようによっては立派な個人情報で、そのことを第三者に知られたら個人の不利益になりえると考えれば、出入りの業者やMR・MSに対しても覚え書きを取り交わすことも多分せねばならないでしょうし、患者さん同士が院内で会うことにも気を使わなきゃいかんのかとも考えたりして、面倒くさくなって仕事をやる気力もそがれてしまい、こりゃ廃業するしかないなあなんて暗い気持ちになります。

うちでは、4月の時点で患者さんの意思を問うべく「名前をお呼びしてよろしいですか？」という一文を問診表に入れました。名前は個人の識別のためのものだからよっぽどのことがない限り「ダメ」という人はいないだろうとたかをくくっていましたが、けっこう名前を呼ばないでくれという人がいます。この場合は番号札を渡してその番号で呼ぶことになるのですが、まだ慣れないというか面食らってしまっていて、なおかつちょっと後悔しています。やっぱり「名前で呼ばせてよ～」というのがこちらの本音です。カルテの表書きはどうするの？とか、ちょっと先走りすぎたかな。

今の日本はどこかがおかしくなっています。権利を主張するが、義務ははたさない的人が多いように思います。義務をはたした上で主張できる権利が生ずるのだと思うのですが、考え方が古いかなあ。子供に痛いことはさせたくないのといっって、重症になるまで連れてこない両親やじいちゃんばあちゃん、本に書いてある通りに子供が育たないといっってノイローゼ気味になる新米お母さんなど、口がふさがらなくなってよだれだらだら出そうな事がいっぱいです。

本題とはずれてしまいました。こんなほやきが出てくるようになるなんて、年をとった証拠だな、こりゃ。イヤお粗末でした。



## 新入会員紹介

やました医院

山下良平

昨年10月、砺波市永福町にて新規に開業致しました山下良平です。

私は、開業前に勤めておりました砺波総合病院を通じて既に医師会に入会しておりましたので、新入会とは言えないのかも知れませんが、今回、A会員となりましたので、改めて自己紹介させていただきます。

私は東砺波郡平村（現在の南砺市平村）の出身で、昭和56年に金沢大学を卒業しました。その後、当時の第一外科（現在の心肺総合外科）に入局して外科医としての修練を積み、そして昭和60年11月より、砺波総合病院に勤めてまいりました。砺波総合病院では、当初は一般消化器外科に携わっておりましたが、平成元年に国立がんセンターへ研修に行かせていただいてからは、主に呼吸器外科領域を担当し、肺癌などの手術に専念してきました。結果的に、砺波総合病院には約19年間勤務していたこととなりますが、この間、医師会の先生方には、本当に多数の患者さんをご紹介いただきました。また、今回の開業に際しましても、多くの励ましのお言葉やご助言をいただきました。今更ながらではありますが、この場を借りまして、改めてお礼申し上げます。

現在、開業して3ヶ月がたち、未だ試行錯誤を繰り返しているのが実情ではありますが、徐々にペースが分かりかけてきたところでもあります。今後も、医師会の先生方や事務の方には、なにかとご迷惑をおかけしたり、またお世話になる機会が多いことと思いますが、何卒、よろしくお願い申し上げます。

市立砺波総合病院 循環器内科

広野正明

この度新入会することとなりました広野正明と申します。昭和36年生まれの43才です。昨年10月より生まれ故郷の市立砺波総合病院に勤務しております。よろしくお願いいたします。

私は昭和61年に金沢大学を卒業後、金沢大学第一内科に入局し循環器を専門として診療して参りました。私が医師になってから18年の間にカテーテルを用いた循環器疾患（虚血

性心疾患、不整脈)の治療が飛躍的な進歩を遂げてきました。特に急性冠症候群に対して緊急にバルーンやステントを用いた冠動脈形成術が施行されるようになり同疾患の予後が著しく改善されました。現在、急性心筋梗塞で入院された場合でも急性期の加療が成功し特に合併症が認められなければ1週間前後で退院し社会復帰が可能となっております。このような治療ができる時代に循環器医として働ける幸せを感じると同時に、急性期の治療の責任の重さを実感しつつ日々の診療に携わっております。

医師会の皆様には何かとご迷惑をおかけすることがあるかとは思いますが、自分を育ててくれた砺波の方々に少しでもご恩返しができるよう頑張っていきたいと思っておりますのでご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

---

## 市立砺波総合病院 精神科

岸 澤 進

平成16年10月1日付けで市立砺波総合病院精神科に赴任いたしました岸澤 進と申します。平成17年1月1日より緩和ケアも併任することとなりました。

生まれは埼玉県東松山市です。東京まで電車で約一時間強、今はベッドタウンとして人口約10万人の町になっています。僕が育った頃は田舎町で、少し街中を離れると田んぼと畑ばかり、今はもうありませんが、「埼玉ダナー」というイチゴを作っている畑が一面に広がっているところもあって(ダナーというイチゴはとても大きく2、3粒が融合しているような形だった。甘くはなく水っぽかった。砂糖をかけて食べていた。)、砺波市と大差のない環境だったように思います。

前任地は七尾でした。平成10年4月から六年半過ごし、未練がないといったら嘘になりますが、同期入局の木下先生が国立がんセンターに赴任が決定したということで、入れ替わる形での就任となったわけです。

精神科医となった理由ですが、いまだに自分ではよくわかりません。なんとなく卒業の頃にそう思ったからとしか言えません。大学は金沢大学ですが、ここも受験前になんとなくそう思って来たというのが本音です。実家は開業医で父はまだ現役の内科医ですが、なぜ地元に戻らないか、といわれるとこれもまた、大学院にそのまま進んでなりゆきにまかせて就職したからということになるのでしょう。

たまたま妻は砺波の人で、砺波総合病院に就職したことで妻の実家とはとても近くなり

ました。砺波では浄土真宗の教えをいただいている家庭が多いようで、妻の実家の法事に参加させていただく折に、お坊様の説教を聴くことができます。これはドライな東京周辺田舎ベッドタウンで育った自分にとってはとても新鮮に思えました。「何かの縁」ということをお坊様がおっしゃっていました。そう思うと精神科医になったのも、砺波でいま働いているのも「何かの縁」ということになり、妙に納得できてしまうのが不思議です。

あまり自己紹介になっていないかもしれませんが、今後よろしくお願い申し上げます。

---

## 石黒医院

石 黒 聖 子

俗っぽくて恐縮ですが、連日マスコミでは名古屋の国際博覧会の話題作りに必死、盛り上げに画策していますが、35年前の大阪万博の時ほどのインパクトはないように思えるのですが、いかがでしょう。あの日本が高度成長に沸きかえって万博が華やかに開催された正にそのとき、期を同じうして、旧福光町に石黒外科医院が開院いたしました。その院長、現在は痩せた体に鞭打ち、しかしながら町の赤ひげ（ひげないけど）として昔かたぎの頑固おやじ然として奮闘していますが、当時は血気盛んな青年医師の我が親父殿であります。その頃わたくしは小学校1年生。福光のような片田舎に転校生が来た！と噂の的でした。その、わたくしが、同業となり、ひとつ処で働くことになろうとは、さしもの頑固親父も思いもよらなかった事でしょう。

昭和63年に医科大を卒業し、内科レジデント後北大第3内科に入局して北大大学病院の他、釧路日赤病院、帯広厚生病院、苫小牧王子総合病院など北の大地を走り回っておりましたが、故郷は遠きにありて思うものと、平成13年に金大の故小林健一教授のお計らいで上市厚生病院に、そして昨年9月からは石黒外科医院の2階を改装し、内科を開業しました。しかして、開業医とは？地域医療とは？総合病院と開業医の違い、役割分担を自ずから知らされる毎日、日々是勉強です。大病院は超多忙ですが、気楽です。開業医は多忙ななかに病気以外の人間と人間のふれあいを、それこそ親類のごとくに考慮せねばならず責任重大です。クールに振舞うことはできません。と、解ったようなことを述べましたが、まだまだ歩きだしたばかりの新参者です。今後、諸先生方に教えを請うこと必至です。何卒よろしくお願いいたします。



## 砺波医師会誌 第184号

### 編集後記

春霞で立山連峰も霞むこの頃です。暖かくなり下手ですが好きなゴルフを待ち侘びていた私にとっては嬉しいかぎり、週に1、2度練習に勤しんでいます。

冬の間にも筋トレしたので少しは上達したかと思いきや又もや大叩きして反省しています。

本号184号は今までの砺波医師会誌と体裁が変わりました。昭和45年9月5日に第1号が発行されてから前号(183号)まで吉田プリントさんに印刷をお願いしていましたが、この時代、ガリ版用紙自体が品薄で入手困難となり印刷変更もやむを得ない事となりました。数年前から度々変更の必要性につき広報委員会内でも議題になったりしていましたが、予算の問題と共に吉田さんの趣のある字体や挿絵を変更する事に躊躇し今に至っていました。これまでこつこつと手書きで医師会歴史を刻んでくださった吉田さんのご努力にあらためて感謝します。今後は吉田印刷さんをお願いしていく事となります。予算さえ許せばこれからはカラー写真も掲載可能です。内容の充実に向け皆様のご協力お願いいたします。

次号の散居村原稿は矢島 眞、山下良平、山本 環、横川 博、吉田康二郎、吉田武雄、吉田頼子、浅山邦夫、網谷茂樹、荒川龍夫、有山 淳各先生にお頼みします。

宣しく願います。

柴田 崇志 記

〔広報委員〕 八尾 直志、高桑 健、網谷 茂樹、柴田 崇志、野村 忠、  
藤井 正則、富田喜久雄、松 智彦、窪 秀之、柳下 肇、  
福井 靖人

